武蔵大学の創造的な教育実践

1. はじめに

和井田 清司（2011 年度 FD 実施委員長）

本学のFD活動の基本を定めた「武蔵大学におけるFD活動の基本的方針と課題」(2011.4大学協議会)には、次のような指摘があります(下線部は引用者)。

> ・授業アンケートや研修会という限定的現象でなく、教育活動改善の総体をFDとして定義する。武蔵大学の個性に即した特徴的な活動を創造する。
> ・個別に取り組んできた教育改善の実践をFDという視点から再評価し、それらの実践を伸ばしつつ新たな活動を開発する。
> ・日常的な教育改善実践をFDの重点場面として重視し、学部・学科・研究科・教務部・課程・センター各組織(以下「学部・学科等」と略記)をFD実施主体として位置づける。全学組織(当面「FD実施委員会」)は、FDに関わる全学的課題の企画・推進にあたるとともに、実施主体である学部・学科等への支援・調整および外部との渉外窓口としての役割をもつ。

ここでいう「個別に取り組んできた教育改善の実践」には、担当者による日常的な授業改善の創意工夫はもとより、それぞれの実施主体によって展開される、学部横断プロジェクト、シャカリキ・フェスティバル、ゼミ大会、卒論発表会、ミツバチ・プロジェクト等の取り組みが含まれております。これらの諸実践を、FD(=教育活動改善の総体)という視点から位置づけるとともに、学内外にそれらの取り組みの特長を紹介し、理解していただくために、本報告書第Ⅲ部として「武蔵大学の創造的な教育実践」を取り上げることとしました。学年末のご多忙のなか、原稿をお寄せいただいた皆様に深謝いたします。

2.「ゼミの武蔵」の新しいゼミを求めて　～FDと「三学部横断型ゼミナール」～

人文学部教授　平林 和幸（教育GP推進チームリーダー）

FDとは、「授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」（中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申）と定義されている。こうした観点から見るなら、「三学部横断型ゼミナール」はまさにFDの申し子といえよう。

ゼミナール形式の授業を改善し向上させたのが「三学部横断型ゼミナール」と言い換えても良いかもしれない。もちろんここでは、ゼミナール形式の昔から行われている授業を否定するものではないということだけは強調しておきたい。

では、どのような点において「三学部横断型ゼミナール」は旧来のゼミと違うのか。結論から言うなら、このゼミの特徴は「開かれたゼミ」であるということに尽きるだろう。教員と学生との相互信頼関係の上に成り立つ課題解決型授業という旧来のゼミの利点をそのまま生かしつつ、教員と学生との閉じられた空間となりがちになってしまう旧来のゼミの特徴を改善しようという試みの一つといえるのである。

「三学部横断型ゼミナール」の特徴は、その名称が示すように各学部から選ばれた担当教員同士並びに各学部の学生同士がオープンな形で融合している点が一番に挙げられるだろう。フェーズ1では、学部ごとに分かれてそれぞれの専門性を生かしつつ与えられた課題について学生が主体的に結論を導き出していく。ここでは教員は補助的な役割に徹し、議論が交錯してしまった場合や本来の道筋からずれてしまった場合に限り議論に介入する。フェーズ2では、担当企業を中心に各学部の教員と学生が学部間の隔たりなく一体となって「CSR 報告書」の作成に当たる。

また、企業から課題を貰い、その企業の担当者から様々な意見を伺うため、企業を通して実社会にも開かれる結果となる。

その他にキャリアコンサルタントによる面談を行うことによって、教員のみによる閉じられた指導体制からの脱却を目指すことになる。

以上見てきたように、各学部教員3名による複数の指導、企業の担当者によるキャンパス外からの指導、キャリアコンサルタントによる面談指導というように、開かれた指導体制をとっているのが本ゼミの特徴といえるだろう。

さらに、成績評価においても学生の所属学部の教員が責任を持って行うが、その際他学部の教員やキャリアコンサルタントの意見を参考にすることはもちろん、学生間の評価さえもある程度参考にする。

最終報告会は、学内外に広く開かれている。そこでは、関係企業の方々はもちろんのことご父母の方々や他大学の教職員の方々も参加し、忌憚のない意見をいただいている。

ここで列挙した「三学部横断型ゼミナール」の「開かれたゼミ」としての特徴はほんの一例にすぎず、他にも多くの点において開かれた特徴を持っているが、与えられた紙面に限りがあるので、この辺で終わりにしたいと思う。最後に「三学部横断型ゼミナール」はまだまだ発展途上にある授業形態といえます。したがって、広く皆様のご意見ご批評を仰ぎたいと存じます。

三学部横断型ゼミナールに関するイベント

3.2011 年度のゼミ大会について

経済学部教授　東郷 賢（ゼミ大会運営委員）

武蔵大学では毎年 12 月にゼミ対抗研究発表大会（通称：ゼミ大会）を開催している。2011 年度は 12 月 10 日（土）に 2 部構成で開催された。

第 1 部では、今年度のゼミ大会のコンセプトである「発見」に基づき、ゼミ大会参加者により多くの「発見」をしてもらうことを目的に、『銀座の街の変遷とブランド ～資生堂・バーバリーの経営戦略～』というタイトルで講演会が開催された。講演者は武蔵大学の卒業生である山下忠氏（株式会社三陽商会）と児玉浩氏（資生堂販売株式会社）の 2 名で、司会は経営学科の黒岩健一郎准教授が務めた。この講演には多くの在校生が参加し、OB の話を聞くことにより、経営学と実社会の接点について理解を深めることができた（写真 1）。

第 2 部は、各ゼミ（2 年生～3 年生）が研究発表を競うもので、今年度 36 ゼミが参加した。具体的には、各ゼミが発表テーマごとにブロックに分かれ発表を行い、卒業生と学内教員からなる 2 名の審査員により審査が行われ、それぞれのブロックごとに優勝、準優勝を決めるシステムである。

毎年ブロックは経済、経営、金融、会計などの専門分野ごとに分かれているが、2011 年度は「震災復興」ブロックを特別に設け、4 つのゼミが参加した。具体的な発表内容は、東郷ゼミ第 2 部「震災復興と我々の考察」、松島ゼミ「新時代農業の構築～野菜工場の有用性～」、丸ゼミ A「復興応援ポートフォリオの提案～預金から投資へ～」、黒坂ゼミ第 2 部「私たちが考える石巻市復興案」と多様な内容であった。審査は、発表内容とプレゼンテーション・スキルの両者の観点からなされ、その結果、松島ゼミが優勝し、黒坂ゼミ第 2 部が準優勝となった。

通常のブロックの優勝ゼミとその発表タイトルを紹介すると、経済 A ブロックは松川ゼミ B の「電気自動車普及による CO2 削減」、経済 B ブロックは下川ゼミ第 2 部の「この会社大丈夫？勢力図と協力ゲームを通して見た株主総会の実態」、経営 A ブロックは杉本ゼミの「マーケティング 3.0 における新たな社会構築」、経営 B ブロックは黒岩ゼミ第 2 部の「トリプルメディア～勝利の方程式～」、経営 C ブロックは河合ゼミ第 1 部の「結婚観から紐解くブライダルビジネス」、金融ブロックは茶野ゼミ第 2 部の「商品市場の価格推移～急激な価格変化～」、金融/会計ブロックは鈴木ゼミ第 2 部の「ゴーイングコンサーン問題を考える～監査の役割～」となっている（全ての発表内容と優勝ゼミ、準優勝ゼミについては表 1 のとおり）。

ゼミ大会は、ゼミナール連合会（通称ゼミ連）という学生団体が主催し、経済学部の教員 2 名がゼミ大会運営委員として、このゼミ連をサポートしていく方法で運営されている。ゼミ連はスケジュール管理から、協賛企業の獲得、各ゼミとの連絡、当日のゼミ大会、その後の懇親会の運営まで全てを担当し、教員は適宜アドバイスを与えるとともに、当日の審査結果の集計を行うことが主な責務である。したがって、ゼミナール連合会の学生諸君は、教室の中の授業では得られない「事業遂行」の実践を、このゼミ大会の運営を通じ学習していくこととなる。

また、発表を行う各ゼミでは、長い時間をかけて、発表テーマ、調査・研究の分担を行い、ゼミの研究分野に関し理解を深めるとともに、当日はいつものゼミ活動では接触することのない聴衆（他のゼミ生のみならず高校生や卒業生）の前で発表することで、プレゼンテーション・スキルの向上も達成することができる。実際、今年度の発表をいくつか見学した限りでは、この目的は遂げられていると評価できる（写真 2）。

ゼミ大会の発表の後は、懇親会が開かれ、ここで審査員と学生諸君の交流および表彰が行わ

れる。学生諸君はスーツでの参加を前提とし、OB 諸氏と交流することで、社会人としてのマナーを身に着けるとともに、先輩後輩の関係を深めていくことができる。表彰は学長より直接行われるため、学生諸君も、その成果を強く実感することができ、来年度のゼミ大会に向けてより一層の努力を行う励みとなることが期待される（写真 3)。

上記のとおり、武蔵大学経済学部においてゼミ大会は勉学の面で大変重要な行事となっており、ゼミナール連合会の学生諸君、参加するゼミ生諸君ともに得難い経験を積んでいると言える。

写真 1：講演会の様子

写真 2：ゼミ大会の様子

写真 3：懇親会の様子

表１：2011 年度ゼミ大会参加ゼミおよび優勝、準優勝

ブロック		ゼミ名	テーマ
経済 A		大野 1	アジアの共通通貨構想
	優勝	松川 B	電気自動車普及による CO2 削減
	準優勝	伊藤 2	環境制約と経済成長
	準優勝	今井(英)2	脱原発は可能か？
		二階堂 2	新興国ビジネス
経済 B		伊藤 1	日本経済復活の条件
	優勝	下川 2	この会社大丈夫？勢力図と協力ゲームを通して見た株主総会の実態
	準優勝	東郷 1	海外援助について
		後藤 2	TPP と日本農業～TPP の危険性と日本農業が進むべき道～
		二階堂 1	中国やインドなどのアジアの発展途上国の経済について
震災復興		東郷 2	震災復興と我々の考察
	優勝	松島	新時代農業の構築～野菜工場の有用性～
		丸 A	復興応援ポートフォリオの提案～預金から投資へ～
	準優勝	黒坂 2	私たちが考える石巻市復興案
経営 A	優勝	杉本 A	マーケティング 3.0 における新たな社会構築
		板垣 1	中国ビール市場における国内企業の動向について
	準優勝	黒岩 1	2014 年の電子書籍
		米山 2	経営戦略
経営 B		古瀬 2	カルト―組織の参加と脱退―
	優勝	黒岩 2	トリプルメディア～勝利の方程式～
	準優勝	尾上 2	ウィルコムの夜明け～次世代を担う通信端末の経営戦略～
		高橋 2	江古田活性化事業
経営 C		増田 2	日本と韓国の経済、教育の違い
	優勝	河合 1	結婚観から紐解くブライダルビジネス
		板垣 2	企業の国際経営についての考察
	優勝	杉本 B	次世代型 OJT の創造～次世代を担う社員を育成するために～
金融	準優勝	安達 A	株式投資
		徳永 2	株主優待は天使か悪魔か
		丸 B	頑張ろう、日本！～金融資産の使い方を見直そう～
	優勝	茶野 2	商品市場の価格推移～急激な価格変化～
		神楽岡 2	リアルオプションを用いて発電エネルギーを評価。
金融/会計		茶野 1	東日本大震災と保険～企業の地震リスクヘッジ～
		坂井 2	パンダの価値という観点から減損と公正価値会計を議論
	準優勝	安達 B	株式分析
	優勝	鈴木 2	ゴーイングコンサーン問題を考える～監査の役割～
		前田 2	大手学習塾業界に未来はあるのか？

4. シャカリキフェスティバル（社会学部卒業研究発表会）

社会学部教授　松本 恭幸

シャカリキフェスティバルは、社会学部の 4 年生による卒業論文・卒業制作の成果を発表する祭典です。「シャカリキ」には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味の 2 つが込められています。

2011 年度で第 3 回目を迎えたシャカリキフェスティバルは、500 名余りの学生が参加し、1 月 21 日（土）に開催されました。中講堂、小講堂、第二小講堂の 3 つの大教室を使い、全部で 9 つの部会が開催され、各部会とも 2〜4 名の社会学科、メディア社会学科の各ゼミを代表する学生による卒業論文・卒業制作の報告と、質疑応答が行われました。そして参加学生は、それぞれ自分が関心のあるテーマの部会を選んで参加し、特に 3 年生以下の学生は優秀卒論・卒制に触れる中、自らの卒論・卒制のテーマ選択や調査研究の手法に役立つ様々なヒントを得ました。

開催された部会、及び各ゼミの報告者とテーマは、以下の通りです。

1. ジェンダー部会（卒業論文）
報告①：社会学科　千田ゼミ
「東京都で『農家の嫁』を覆す：女性起業家の生き方」
報告②：メディア社会学科　中橋ゼミ
「新たな「女子」の誕生－現代のメディアが描く「女子」とは何か－」
報告③：社会学科　中西／中島ゼミ
「就職活動における男性の葛藤」

2. メディア表象部会（卒業論文）
報告①：メディア社会学科　江上ゼミ
「インターネット社会における新聞の役割と本質――大学生のニュース情報の認識」
報告②：メディア社会学科　小玉ゼミ
「福島第一原子力発電所事故が『人災』とよばれる理由」
報告③：メディア社会学科　小田原ゼミ
「甲子園から見る現代のスポーツヒーロー像〜演出されるヒーローたち〜」

3. ACG 部会（卒業論文）
報告①：社会学科　矢田部ゼミ
「コミックマーケットスタッフの社会学」
報告②：社会学科　栗田ゼミ
「BL と百合から見る女性－変化する男性優位－」
報告③：メディア社会学科　粉川ゼミ
「乙女ゲームと女性」
報告④：メディア社会学科　松本ゼミ
「地域プロモーションの新たな戦略－秋田県羽後町の取り組みからみえるもの－」

4．社会と文化部会（卒業論文）
報告①：社会学科　内藤ゼミ
「現代韓国における『伝統的』家族行事－旧正月に行われる家族行事の変化－」
報告②：社会学科　橋本ゼミ
「世界一の学歴社会　韓国の学歴格差と学歴意識」
報告③：社会学科　菊地ゼミ
「現代日本における貧困と住宅の関わり」

5．コミュニケーション部会（卒業論文）
報告①：社会学科　武田ゼミ
「ゲームを通じたコミュニケーション－peercast と動画配信－」
報告②：社会学科　小川ゼミ
「大学生の友人関係の継続について」
報告③：社会学科　山嵜ゼミ
「笑いの解剖－対人コミュニケーションの築き方－」

6．サブカルチャー部会
報告①：メディア社会学科　永田ゼミ
「デパ地下の社会学～売場体験から見えたワンダーランド～」
報告②：社会学科　大屋／佐藤ゼミ
「『懐かしさ』とは何か－昭和 30 年代ブームの社会学－」
報告③：社会学科　南田ゼミ
「刺青の社会学」

7．映画と写真部会
報告①：メディア社会学科　松本ゼミ
「ミニシアターの果たした社会的な意味-ミニシアターの大きな価値-」（映像）
報告②：メディア社会学科　永田ゼミ
「『NAMI』の写真家～梶井照陰を追って～」（写真）

8．東京生活部会
報告①：メディア社会学科　小田原ゼミ
「東京を走る現代の行商-信頼を売る魚屋-」（映像）
報告②：メディア社会学科　永田ゼミ
「Is@TOKYO」（写真）

9．人間の内面に迫る部会
報告①：メディア社会学科　永田ゼミ
「児童虐待と向き合うこと～ボクが見て考えた 500 日～」（映像）
報告②：メディア社会学科　永田ゼミ
「『わたしのたからもの』～人と物の密なる関係性とは～」（写真）

5.地域連携：江古田ミツバチプロジェクト

人文学部教授　丸橋 珠樹

学びの場には楽しいことが多いほど良い。したいことが楽しさの源泉です。成長し変化していく自分を自覚すること、あるいは、今まで経験したことのなかった事柄や人間関係に触れることは、楽しさの一側面です。楽しさの源泉である「したい」という強い動機が、一歩前への原動力となります。

ゼミの武蔵ですから、ゼミや演習活動がその場になっているに違いありません。同僚の加藤先生に教えてもらったのですが、大学教育の多くは扇子型だそうです。先生が扇の要であり、先生と学生との関係が扇の骨です。大切なのは扇に張ってある風を送る紙であり、紙に描かれた絵模様である。つまり、ゼミや演習全体に広がる学びのネットワークが無ければならないし、学生たちが主体的に絵を描くようになっていく必要があるというのです。そうでなければ、扇の要である先生がいくらがんばっても、紙なしの扇子ではどうしようもありません。一時間半という時間が数本の骨との静かなで細いやり取りで過ぎて行くことになりかねません。共同して創りあげる楽しさに満ちた一時間半となっているゼミや演習も沢山あると聞いています。

ここで紹介するのは、武蔵大学の特色を生かした、楽しい時間を過ごせる、そして、地域にも貢献できるプログラムです。ところで、武蔵大学の選択動機の一つとして、豊かな緑のキャンパスという項目があります。大学への通学路、密集した江古田駅前商店街を抜けて、キャンパスに入ると大きな木々が多数茂っています。武蔵のシンボルツリーは「武蔵のオオケヤキ」と呼ばれ、三号館中庭に大きく樹冠をひろげています。そんなキャンパスの雰囲気を支えているのが、武蔵学園の緑を創り護る伝統です。その始まりは九十年前に武蔵学園・武蔵大学の前身の旧制武蔵高等学校が創設されたときに遡ります。

当時の環境を知る良い資料があります。買収した地籍についての番地ごとの地目と広さのリストです。すすぎ川沿いには田が開かれ、わずかの高低差ですが灌漑が行き届かない大部分は畑や屋敷、そして屋敷林になっていました。この変化の激しい時代、九十年前をそのまま想像することは難しい。まして、自然や生き物とのつながりが年々希薄になっていく巨大都市ではなおさらです。

武蔵にある巨木を見上げるとずっと昔から生えていたと思いがちですが、創設の九十年前にも育っていた木は数本に過ぎません。学生たちに常々言うのですが、昔畑だった場所に木を植林し、幾多の建設計画のなかでも伐採することなく、護ってきたのです。一本一本の木にとっては光を存分に受けて育つ環境だったので、こうして樹齢はさほどでもないのですが、大きく生き生きとしているのです。自分たちも自分の光を沢山受ける場所を探して、動き回りなさい、動物なのだから。動き回らないでも大学にプログラムを持ち込んだのが「江古田ミツバチプロジェクト」です。活動目標は、代表の谷口さんの次の言葉に意が尽くされています。

谷口代表メッセージ

　このプロジェクトは、直接的にはミツバチという小さな生き物の世話をすることですが、人々に環境や自然への思いを呼び覚ますと同時に、その恵みを活かしたブランド品つくりによる「まち」の活性化や花いっぱいの運動、大学の研究・映像づくり、さらには人々の交流拡大によるコミュニティーの再生など、「広がりのある活動」に発展してきています。大学、商店、地域の多彩な人々が前向きに、楽しく、協力する活動。みんな生き生きとしていますよ。よろしかったらみなさんもどうぞ！

　この活動の広がりについては一石五丁の面白活動と表現しています。1）ミツバチの飼育と採蜜、2）花いっぱい運動など、ミツバチの活動しやすい地域づくりと、まち環境の向上、3）ハチミツによるブランド品づくりと、まち・商店街の活性化、4）ミツバチの活動を含む環境教育の推進、5）子どもから大学生、一般市民まで含む交流の促進とコミュニティーの回復

お隣の日大藝術学部の学生さんかデザインしてくれた「江古田ミツバチプロジェクト」のロゴマーク（左）
観察会では武蔵の学生がパネルを持って説明していた（右）

　武蔵学園長有馬先生に相談すると「面白そうじゃないか、ぜひやってごらん」と薦められました。同じような活動を始めようとしたのですが、ハチを飼うなんてとんでもないと却下されてしまった大学もあったそうです。「自ら調べ考える」強い動機をもたらす活動であり、武蔵の伝統を引き継ぐことにもつながると判断してくださったのです。

　学生たちに講義で問いかけるのですが、「一昨年から、皆さんの頭の上をミツバチが八万匹飛び回っていますが知っていますか？ミツバチを良く見かけるようになりましたか？」「ミツバチを飼っているとは聞いていますが、ミツバチが増えた気はしません」と学生は答えます。見ようとしないものは見えません。サーチングイメージが形成されていないのです。

　一度の強い経験によってサーチングイメージは形成され、自分のなかに入り込んだイメージはなかなか変化しません。ハチは刺す、怖い、危険...と連鎖して行きがちですが、養蜂を経験すればその連鎖が全く別の方向へと歩みはじめるに違いありません。この江古田ミツバチプロ

ジェクトの鍵言葉は「ミツバチは家畜」です。昆虫を家畜と聞くと奇妙な気もしますが、人間が人為選択してきて利用している生物と言えば、学生も納得してくれます。蚕や酵母菌、納豆菌など多様な自然の恵みに生かされているのが人間なのです。人も自然のつながりの一つなのだと実感できる活動です。なによりもミツバチがかわいくなります。

自分の世界観や価値観がパチンとはじけたり、ガラッと変化したりする「楽しい活動」が沢山ある武蔵大学になると良いと思っています。色んなプログラムを動かしています。「国東半島の農業の今と歴史を訪ねて」大分県国東市武蔵町との二十年になろうとする交流を引き継いだプログラムです。「学校山林間伐体験」アメリカとの戦争が始まる年に埼玉県毛呂山町に植林した武蔵学園の檜林を手入れしている活動です。戦争「武蔵ハーブプロジェクト」8 号館の空中庭園でハーブを育て、武蔵蜂蜜を入れてお茶会を楽しもうという活動です。「農たい」では保谷の農家さんで簡単なお手伝いをしています。「赤城山野外実習」では、武蔵の赤城青山寮がある赤城山で森林と野生動物の相互作用を調査しています。

最後に宮本常一が旅立ちの日に父から授けられた十か条（宮本常一『民俗学の旅』より）いくつかの言葉を引用してこの活動の紹介を終わります。

旅立ちの日に父に授けられた十か条から抜粋

時間のゆとりがあったら、出来るだけ歩いてみることだ。いろいろのことを教えられる。金というものはもうけるのはそんなにむずかしくない。しかし使うのがむずかしい。それだけは忘れぬように。これからさきは子が親に親孝行する時代ではない。親が子に孝行する時代だ。そうしないと世の中はよくならぬ。自分でよいと思ったことはやってみよ、それで失敗したからといって、親は責めはしない。 人のみのこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしっかり歩いていくことだ。